

あめ かぐやま

## 「天の香具山」

春過ぎて 夏来るらし 白たへの

きた

ころもほ

あめ

衣干したり 天の香具山

作者・持統天皇（卷一―二八）  
じとうてんのう

### （解説）

春が過ぎて夏が来るらしい。真っ白な衣が干してあるから、天の香具山に。

（1）この歌は持統天皇（第四十代）が新緑の香具山を背景に真っ白な衣が干してある。それを見て春が過ぎてもう夏がやってきたらしいと。

季節の推移に心躍るものを感じたのであろうと思われる御製歌である。なお、この歌の背景には新時代の到来の喜びと意気込みもこめられているに違いないとの説もある。

（2）この歌は日本の和歌史にあつて、季節の推移をうたった最初の歌であり、古来名歌として親しまれてきた歌でもあるともいわれる。

（3）なお、この歌は「新古今和歌集」「百人一首」に『春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山』とあらため収載されてさらに親しまれる歌となったといわれる。

（4）この歌に詠われている「香具山（標高152.4メートル）」は奈良県の

奈良盆地の南部、飛鳥周辺に畝傍山・耳成山とともにぽっかり浮かぶように並び二つの山とともに「大和三山」と呼ばれている。

(5) 香具山は天から降りてきたという神聖な山としての伝承があり、この万葉集では「天の」を冠した「天の香具山」と詠われている。このことから、この歌にうたわれている「白たへの衣」は神聖な香具山に干された斎衣（香具山を祭る人たちの着る衣）かとする説もある。

(6) また、この一首はいつの詠作かについては①夫・天武天皇の宮であった飛鳥浄御原宮あすかきよみはらのみや（奈良県明日香村岡・本シリーズ第五回に掲載）で持統天皇として即位（六九〇年）後の初夏、浄御原宮から香具山を北方に見ての作と思われる。②次の宮となる藤原の宮の完成前の数度にわたる新都視察のおり香具山を見ての作であろう。③飛鳥浄御原宮から藤原京への遷都後、程なくして、宮居の窓辺から香具山を眺めて詠まれたものである。時に持統八（六九四）年であった。

・ 以上のように幾つかの説があり決定したものはないようである。

（参考文献）・ 清原和義著「万葉の歌」・ 桜井満著「万葉集を知る事典

・ 米田 勝著「心の原風景―万葉を行く」等



(写生地)・持統天皇がこの歌を詠まれたとの一説がある藤原宮跡(奈良県  
橿原市醍醐町)から天の香具山を描く。(池田杏花)